

天理で育まれた「心の演奏」

元 舞 ヴィオラ奏者

(41歳・名高分教会ようほく)



「ムジークフェストなら2015」に特別ゲストとして招かれ、演奏する元舞さん (13日、奈良県文化会館で)

「音楽家の役割は、人々の心に響くものを提供することです。世界をよりよくするため」
今月13日、奈良県文化会館で開かれた「ムジークフェストなら2015」のクラシック・コンサート「序の宴」に出演したヴィオラ奏者・元舞さんを、2階席から撮影した。楽屋を訪ねると、こう話してくれた。

彼女は、幼少から天理教音楽研究会「弦楽教室」へ通い、素晴らしい先生方に恵まれて才能を伸ばし、18歳のとき、天理教一れつ会派遣生として米国へ留学した。
ヴィオラの音色が自分の歌声の音域に近いことに親しみを覚え、渡米を機に、バイオリンからヴィオラへ転向した。

現在、世界最高峰の弦楽四重奏団の一つ「ボロメーオ・ストリング・クアルテット」のヴィオラ奏者として、聴衆の心に響く演奏に日々精進している。

ところで、弦楽四重奏の中で、ヴィオラはどんな役目を担っているのだろうか。

「つなぎの役目です。演奏するとき、ヴィオラが柔軟性を

持つことで、全体を輝かせることができるんです」と答えてくれた。

「つなぐ」ということは、どの社会でも地味な役割だが、とても重要な。言葉や態度に温かみを持たせ、相手が自然に「つながり」を感じられるように努めることで、全体として素晴らしい大きな力が生み出される。天理において、大切にされている教えの一つではないか。

実は、音楽家としてハッと気づかされる出来事があったという。
「ボロメーオが毎年招待されて演奏するロサンゼルスでのコンサートのこと。ある年、同じ日に三つの町で同じ曲を弾かなければならず、最後がロサンゼルスでした。自分では頑張ったつもりでしたが、疲れもあって正直、ベストといえる演奏ではありませんでした」

演奏後、毎年聴きに来ている男性老人が杖を突きながらそばへ近寄り、「僕が一番好きな曲目でうれしかった」と声をかけてくださった。

「そうだ。演奏会は、人の時間をもらい、その時間を使わせていただかないと聴いても聞えない。人生の大切な時間を頂く仕事をしているのだから、常に万全の準備をして演奏に臨まなくてはだめだ」

翌年、その老人は現れなかった。

舞さんの大切な楽曲は、ベートーベンの作品132第3楽章「病より癒えたる者の神への聖なる感謝の歌」という。天理で育まれた舞さんの「心の演奏」は、僕の胸にもしっかりと刻まれた。



Handbook

天理のはたらく、手

人物編

【写真・文】 フォトジャーナリスト

小平尚典

No.24